

ヘミングウェイ作品に見られる思考の拒否について

新井 哲 男

(平成8年9月30日受理)

On Trying Not to Think in Hemingway's Works

Tetsuo ARAI

(Received September 30, 1996)

1

人間の尊厳を「考える葦」に例えたパスカルの言葉はあまりにも有名であるが、考えることが他の動物と人間とを区別する特徴だとすれば、考えないでする人間の行動は、ある意味で人間が動物の一員として持っている動物本能に基づいていると言えなくもないであろう。

アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)は、父親に宛てた1925年3月20付けの手紙の中で、「私の書いた作品では、現実生活の感じがそっくりそのまま読者に伝わるように、即ちただ単に生活を描いたり、批判したりするのではなく、実際にそれが生きたものとなるように努めています。そこで私の書いたものを読んだ時、あなたは実際にものごとを体験するのです。」(You see I'm trying in all my stories to get the feeling of the actual life across—not to just depict life—or criticize it—but to actually make it alive. So that when you have read something by me you actually experience the thing.)¹⁾と述べている。読者が書物に描かれているものを頭で理解するのではなく、書物を通して身体全体で読者に体験させるということは、作者が読者の持つ五感に直接訴えかけようとするものである。

例えば、『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)で老人は、3日間に及ぶ戦いの末捕えた大魚を港に運ぶ途中、鮫の大群に襲われる。この鮫の群れを目にした時の老人の嘆きは、次のように記される。

“Ay,” he [the old man] said aloud. There is no translation for this word and perhaps it is just a noise such as a man might make, involuntarily, feeling the nail go through his hands and into the wood. (p.107)²⁾

(ああ、と彼[老人]は言った。このことばを他の語で言い表わすことはできない。言ってみれば、まさに、板に押しつけられた手に釘が打ち込まれる時、人間が思わず発するような音である。)

この英文の背景には、西洋人であれば誰もが知っている手足を釘で打ちつけられて十字架の上の人となったイエス・キリストの嘆きと痛みがあるが、作者は読者の持つ文化的体験をうまく利用し、それに直接訴えかけている。つまり、作者は、老人の嘆きの声を「言葉には翻訳できないもの」と位置づけ、「人間が手のひらに釘を打ち込まれる時に発する音」と読者の感覚に直接訴えて定義するのである。

同じような例は、『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*)にも見られる。パンブローナでの祭りが始まる場面である。

At noon of Sunday, the 6th of July, the fiesta exploded. There is no other way to describe it. (p.152)³⁾

(7月6日、日曜の正午に祭りは爆発した。こうとしか言いようがない。)

祭りは「まるで何かが爆発したように」始まったのではない。まさに爆発したのである。作者は、全く突然に

* 英語英文学科 第一米文学研究室

あたりの空気が一変した祭りの臨場感を「爆発」という語で、読者の感覚に直接伝えている。

ヘミングウェイの最初の短編集『我らの時代に』(*In Our Time*)においても、読者の感覚に直接訴える表現が目立つ。例えば、冒頭に置かれた作品「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp”)において、ニック(Nick Adams)は父親に連れられ、朝霧の立ちこめる暗い中、湖を渡りインディアン部落へ行く。そこでニックは、インディアンの女性の出産場面を目撃する。それは、ジャックナイフと釣り糸による帝王切開という暴力的で異常な出産である。しかしその出産は、結果として成功裡に終わり、一つの生の誕生をもたらす。だがニックは、その場で、一つの死をも目撃する。インディアンの夫が暴力的で異常な生の誕生の場面に耐えられず、喉を掻き切り自殺してしまうのである。こうしてニックは、生の誕生と死を同時に目撃した後で、太陽が昇りかける一日の始まりに、再び湖を渡り家路につく。作者は、この作品で、ニックが父親に連れられ湖を渡りインディアン部落へ行く場面には、「水の上は冷たかった。」(It was cold on the water.)(p.15)⁴⁾(下線は筆者)という文を置き、ニックがインディアン部落から帰る場面には「太陽が丘の上に昇りかけていた。バスが一匹飛び跳ね、水面に円を描いた。ニックは水に手を浸して引きずった。鋭い朝の冷気の中で温かく感じられた。」(The sun was coming up over the hills. A bass jumped, making a circle in the water. Nick trailed his hand in the water. It felt warm in the sharp chill of the morning.)(p.19)(下線は筆者)という文を置いている。作品の最初と最後に置かれた2つの語 ‘cold’ と ‘warm’ が対比的に用いられているのは明らかである。作品の最初に置かれた ‘cold’ は、行き先も告げられず、夜も明けきらない暗い中、湖を渡っていくニックの不安に満ちた緊張した思いを読者に伝え、作品の最後に置かれた ‘warm’ は、丘の上に昇りかけている太陽や、魚が飛び跳ね水面に円紋を描く平和な光景とともに、一つの生と一つの死を自分の目で直接体験したニックの成長した心の落ち着きを伝えている。

寒暖を用いて登場人物の心情を伝える工夫は、次に置かれた作品「医者と医者妻」(“The Doctor and the Doctor's Wife”)でも効果的に用いられている。流木を薪にする件で、雇用人ディック・ボルトン(Dick Boulton)と激しい口論をしたニックの父は、怒

りを表に出したまま、彼らに背を向け、別荘に戻るが、別荘の中でも彼は、ディックと口論をしたことで、彼の妻と鋭く対立する。居場所のなくなった彼は、別荘も出て、森に行く。森に入る医者について、作品には「彼は暑い中、門を出て、小道を歩き、梅の森に入った。森の中は、こんな暑い日でも涼しかった。」(He walked in the heat out the gate and along the path into the hemlock woods. It was cool in the woods even on such a hot day.)(p.27)⁵⁾(下線は筆者)と記されている。作者は、ここでもまた ‘cool’ と ‘hot’ という語の対比により、森に入った医者の清々しく、爽やかな心情を読者に直接伝えている。

2

『老人と海』で老人は、84日間の不漁にも挫けず、ただ一人で大海原に小舟を出す。海に出て孤独を感じる。孤独をまぎらすために、彼は独り言を言う。「『わしが大大声で話をしているのを他の人が聞いたら、わしのことを間違いだと思うだろう。』と彼は言った。『だが、わしは間違いではないのだから構わん。それに金持ち連中は舟の上にラジオを持ち込んでいて、ラジオが彼らに話しかけてくれるし、野球を伝えてくれる。』」(“If the others heard me talking out loud they would think that I am crazy,” he said aloud. “But since I am not crazy, I do not care. And the rich have radios to talk to them in their boats and to bring them the baseball.”)(p.39)しかし、作者は、この文の後に次の文を置く。「今は野球のことなど考えている時ではないと彼は思った。今はただ一つのことを考えるべき時だ。そのためにこそ俺が生まれてきたそのことを。」(Now is no time to think of baseball, he thought. Now is the time to think of only one thing. That which I was born for.)(p.40)つまり、作者は、老人に「おまえは漁師として生まれついたのだから、魚を獲ることだけを考えろ。他のことを考えるのではない。」と考えさせるのである。そして、このようにして邪念を吹き払い、魚を釣ることに神経を集中させ、「今日は85日目だ。だからどうしても今日はうまく釣らなければならん。」(But today is eighty-five days and I should fish the day well.)(p.41)と決意を新たにさせた直後に、老人の釣針に3日間の死闘を繰り広げることになる大魚を食いつかせるの

である。

大魚との戦いが始まった後も、老人はしばしば考えることを拒否する。大魚が老人の鉤針にかかって数時間後、大魚はまだ一度も海上にその姿を見せない。釣り綱を境に老人と大魚は引きあっている。この状態の中で、老人は「何も考えないで、ただ耐えることに努め」(He... tried not to think but only to endure.)(p.46), 「鉤針が口にかかっているのは奴[大魚]なのだ。」(It is he that has the hook in his mouth.)(p.46)と自分に言いかけせる。

その後、再び野球のことが老人の頭に浮かび、大リーグの結果はどうなったのだろうかと考えた時、即座に作者は、「おまえは今自分のしていることを考えろ。愚かなことをしてはいけない」(Think of what you are doing. You must do nothing stupid.)(p.48)の文を入れる。

大魚との戦いが始まり2日目に小鳥が飛来し、老人の綱にとまる。老人は、自分と同じように疲れ切っている小鳥に話しかけ、激励し、憩いを得、慰みを得る。しかし、老人が慰みを得、心を許し、気を緩めた瞬間に、大魚は突然暴れ出し、老人を引き倒し、右手を負傷させる。気がついた時には、小鳥はどこかへ飛んでいってしまい、見えなくなっている。その時、老人は「なぜわしはあの魚の一暴れで手を切ったりしたのだ。」(How did I let the fish cut me with that one quick pull he made?)(p.56)と考え、その答として「たぶんわしはあの小鳥を眺め、小鳥のことを考えていたのだ。」(... perhaps I was looking at the small bird and thinking of him.)(p.56)と、小鳥に気を取られ、大魚に対する自分の気が緩んでいたことを認める。その後で、彼は、「さあ今は、自分の仕事に注意を向けよう。」(Now I will pay attention to my work....)(p.56)と改めて気を引き締める。

このように、老人は戦いの間、何度も邪念に引き込まれそうな自分を叱咤激励し、自分がそのために生まれついたそのこと、つまり漁をすることにのみ神経を集中させようと努める。そして、最後に大魚を仕留める。

何事も考えず、ただ一点に神経を集中させ、そのことにより始めて、事が成就する。そのような活動にヘミングウェイは魅かされている。大魚を相手にした戦いだけではなく、彼が扱う題材の多くは、思考の拒否と結びつく。彼は闘牛を扱った専門書といわれる『午後の死』(Death

in the Afternoon)の中で「戦争が終わった今となつては、生と死が、即ち激烈な死が見られる場所は闘牛場だけであり、それをじっくり見るために私はどうしてもスペインへ行きたかった。」(The only place where you could see life and death, i.e., violent death now that the wars were over, was in the bull ring and I wanted very much to go to Spain where I could study it.)(p.2)⁴⁾と述べるが、闘牛もまた、牛と戦う闘牛士にとっては、思考が排除されなければならない場所である。作者は、『日はまた昇る』で、主要登場人物の一人であるコーン(Cohn)に「僕は自分の人生がこんなにも早く過ぎ去っていき、しかも本当にはその人生を生きていないと思うと耐えられない。」(I can't stand it to think my life is going so fast and I'm not really living it.)(p.10)と語らせ、ジェイク(Jake Barnes)に「闘牛士を除いては、自分の人生を十分に生き抜いている人なんていないよ。」(Nobody ever lives their life all the way up except bull-fighters.)(p.10)と答えさせている。

さて、ジェイクが現代で唯一自分の生を十分に生きているという闘牛士に関し、真の闘牛士魂が見られるのが短編「挫けぬもの」(“The Undefeated”)である。闘牛士のマヌエル(Manuel Garcia)は、闘牛場で牛と向かいあう。

He knew all about bulls. He did not have to think about them. He just did the right thing. His eyes noted things and his body performed the necessary measures without thought. If he thought about it, he would be gone.

...He was conscious he must do all this, but his only thought was in words: “Corto y derecho.”

“Corto y derecho,” he thought, furling the muleta. Short and straight.(pp.46-47)⁵⁾
(彼は、牛のことは何でも知っていた。牛について考える必要はなかった。彼は、ただ、やるべきことをした。目が状況をきちんと捉え、何も考えなくても身体が必要な行動を取った。もし考えたりしていたら、殺られる。

…このことすべてをしなければならないと知って

いたが、彼の頭の中にあったものは、ただ一つ、
「す早く、真っすぐに」という言葉だけだった。

「す早く、真っすぐに」と、彼は闘牛用の赤布を
巻きながら考えた。す早く、真っすぐに。）

ここに述べられた闘牛士魂は、『老人と海』における漁師魂と極めてよく似ている。『老人と海』では、老人の漁師魂は、次のように述べられる。

He kept them straighter than anyone did,....

But, he thought, I keep them with precision. Only I have no luck any more. But who knows? Maybe today. Every day is a new day. It is better to be lucky. But I would rather be exact.(p.32)

(彼は誰よりも真っすぐに綱を垂らした。……)

しかし、と彼は思った。わしは、正確に綱を垂らしている。ただ、もう運がないだけだ。だが、誰に分かる？ たぶん今日だ。毎日が新しい日だ。幸運であれば、その方がいい。だが、それよりもわしは正確にやりたい。)

自分の持つ技術を武器に、無心に動物を相手に勝負をする。この点においては、釣りも闘牛も変わらない。ヘミングウェイは題材こそ異なるが同じことを重ねて主張しているのである。

これは、ライオンや水牛などの猛獣を相手にした狩猟でも同じである。「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber”)で、前日のライオン狩りで失敗し、醜態を曝け出したマコーマー(Francis Macomber)は、翌日の水牛狩りで名誉挽回をはかる。前日の態度とは一変し、臆病心はかけらも見せず、血気にはやる。夫婦の間の綱引きにおいても、妻が浮気をしてきても有効な反撃の手段を持たなかった前日の妻の尻に敷かれた亭主から、妻が怯えるほど妻に対し主導権を握った夫となる。このような変化をとげるマコーマーを見て、狩猟案内人のウィルソン(Wilson)は、「彼は戦争中にこれと同じようなことが起こるのを見たことがあった。純潔を失うよりも大きな変化だ。恐怖が手術をしたように消えてなくなるのだ。何か他のものがその場所に生まれてくるのだ。男が持つ主要なものが、それが彼を男にしたのだ。女にだっ

て、それは分かる。恐怖は全くない。」(He'd seen it in the war work the same way. More of a change than any loss of virginity. Fear gone like an operation. Something else grew in its place. Main thing a man had. Made him into a man. Women knew it too. No bloody fear.)(p.150)⁹⁾と考えるが、マコーマーがこのような変化を遂げた原因について、ウィルソンは「狩猟という奇妙な機会が、即ち前もって悩むことなしに、突然、大急ぎで行動に移らなければならないということが、マコーマーにこれをもたらした。だが、経緯はどうであれ、起こったことは確かに起こったのだ。」(It had taken a strange chance of hunting, a sudden precipitation into action without opportunity for worrying beforehand, to bring this about with Macomber, but regardless of how it had happened it had most certainly happened.)

(p.150)と考える。つまり、くよくよ悩んでいる暇の無いことが、マコーマーを男に変える一助になったのである。彼は、マコーマーに、水牛を射つ時の忠告として、「空想めいたことをしようとしてはいけない。その場で一番やりやすい射撃をするんだ。」(Don't try anything fancy. Take the easiest shot there is.)

(p.152)と言う。狩猟においては、頭で考えて、何か格好の良いことをしようとしても無駄だ。何も考えずに、その場でできる最善のことをするしかないのである。

3

『午後の死』において、闘牛場と並んで「激烈な死」の見られる場所とした戦場においても、ヘミングウェイは頭で物事を深く考える兵士を好まないようである。『武器よさらば』(A Farewell to Arms)第9章で「戦争ほど悪いものはない。」(There is nothing as bad as war.)(p.50)⁹⁾と言い、「戦争は勝利によって終わらない。」(War is not won by victory.)(p.50)と言うパッシーニ(Passini)は、結果として、議論の後に起こった敵の砲弾の炸裂により死亡してしまう。戦争論議の中で最も戦争を嫌っていた男が、結果として敵の砲弾を受け、真っ先に死んでしまうことは、大きな皮肉であるが、なぜこの場面でのこの男が死ななければならなかったのであろうか。ただ単に、偶然に、彼が犠牲者として選ばれたと考えられないこともないが、あえて

この場で、他ならぬ戦争を最も嫌っていたこの男が死んだことには、作者のなんらかの作為が込められていると考えたほうが自然であろう。もちろん、戦争の悲惨さを訴えるためには、砲弾による死者は必要であろう。しかし、作者は戦争の悲惨さを誰よりも訴え、戦争の虚しさを最も強く語っていたパッシーニを砲弾の犠牲者とした。まるで、批評家がよくする如く、頭で考え、戦争についてあれこれ批評しても、現実には何の役にも立たないのだと皮肉っているようでもある。もちろん、この作品の主人公ヘンリー(Henry)は、後に戦争の汚い面を実感し、自分一人で「単独講和」を宣言し、戦線を離脱し、隣国へ逃亡するのであるから、作者が戦争を肯定しているということでは決してない。しかし、パッシーニの熱い議論とその直後の彼の死を考える時、人間が頭で議論することの虚しさを考えざるを得ない。

ヘミングウェイは、この作品の始まりの章で、戦争が行なわれている地方にコレラが蔓延した挿話を入れ、「結局、軍隊で、わずか7000人がコレラで死んだだけだった。」(…and in the end only seven thousand died of it [the cholera] in the army.)(p.4)と記すが、7000人という死者は、戦争の行われている軍隊においては、「わずか」なのである。「わずか7000人」という客観的な数字による冷たい現実を目にする時、人間が頭で考える複雑な議論は色褪せ、重要性を失う。作者は同じ作品の第27章で、「私は、いつも『神聖な』、『栄光ある』、『犠牲』という語や何の意味もない虚しい表現に当惑した。…『栄光』、『名誉』、『勇氣』、『神聖化』というような抽象的な語は、村の名前、道路の番号、川の名前、連帯の番号、日付という具体的な名前と比べてみると、実に鄙猥である。」(I was always embarrassed by the words sacred, glorious, and sacrifice and the expression in vain. ... Abstract words such as glory, honor, courage, or hallow were obscene beside the concrete names of villages, the numbers of roads, the names of rivers, the numbers of regiments and the dates.)(pp.184-85)と述べる。栄光、名誉、勇氣、神聖化という語は、戦争で兵士の士気を鼓舞するためによく使われる語であるが、これらの抽象語、つまりちっぽけな人間が頭のなかで考え、作り出した語は、虚偽に満ちた実に汚いものなのである。

抽象を排し、具体を好む考え方は、複雑な社会を忌避

する考えとなって帰還後の兵士にも受け継がれる。「兵士の家」(“Soldier's Home”)で、帰還兵士のクレブス(Krebs)は、毎日何もしないでぶらぶら過ごし、母親から説教を受け、家を出ていくことを決意する。彼はこの作品の中で、町に行く若いアメリカ女性たちの姿を眺め、漠然と女友達を持ってよいとは感じるが、彼女たちに話しかけ、積極的に彼女たちと付きあおうとはしない。彼は、若い女性たちの住む世界を「とても複雑な世界」(…they [the young girls] lived in such a complicated world....)(p.71)¹⁰⁾と定義し、「彼は、陰謀術策の世界に入りたくはなかった。彼はどんな求愛でも、それをしなければならぬのはいやだった。」(He did not want to get into the intrigue and the politics. He did not want to have to do any courting.)(p.71)と述べる。更にまた、クレブスが定職につかず、恋人もなく、ただ漫然と毎日を過ごしていることで、宗教心の強い母親と諍いをした後では「彼は、自分の人生が複雑にならないように一生懸命に努めてきたのだった。」(He had tried so to keep his life from being complicated.)(p.76)と考えている。ヘミングウェイは、複雑な人間社会から一步距離を置いて生活せざるを得ない元兵士の姿を「兵士の家」で描いている。

先にも述べたヘミングウェイの最初の長編小説『日はまた昇る』も戦争の傷跡を強く感じさせる作品である。ジェイクは戦争で受けた傷のために、性不能者となっている。このために、彼はブレット(Brett Ashley)と互いに深く愛しあいながらも結ばれることはない。第4章の終わりで、作者は、ジェイクが感じるどうしようもない辛い気持ちを読者に伝える。「昼間は、どんなことについてもハードボイルドになるのはひどく簡単だ。しかし、夜となると話は別だ。」(It is awfully easy to be hard-boiled about everything in the daytime, but at night it is another thing.)(p.34)つまり、昼間は、物ごとに耐え、何も考えないようにすることも容易にできるが、夜になると全く別で、どんなに考えないように努めてもそれはとてもできないというのである。戦傷ゆえに、深く愛しあいながらも、決して結ばれることのないジェイクの辛い気持ちが“hard-boiled”の語により痛いように読者に伝えられるが、このジェイクの姿は、何も考えずに、ただ必死に耐えて生きようとする一人の男の姿でもある。

ヘミングウェイの晩年の作『老人と海』で、作者は老人に「何も考えないようにし、ただ耐え」(He...tried not to think but only to endure.)(p.46)させた。また、老人に「わしは奴に、人間にはどんなことができ、人間がどんなことに耐えられるかを見せてやる。」(I will show him what a man can do and what a man endures.)(p.66)と決意表明をさせている。最初の短編集『我らの時代に』の冒頭に置かれた作品「インディアン・キャンプ」では、妻の出産の状況に「耐えきれず」自殺してしまうインディアンの夫を登場させ、自殺の原因について、ニックの父に「彼は耐えられなかったんだと思う。」(He couldn't stand things, I guess.)(p.19)と語らせている。また、この作品には、出産の際に妊婦の上げる金切り声に耐えられず、声の聞こえない所まで避難しているインディアンの男たちも登場させている。ヘミングウェイが、彼の著した作品群の最初の作品と最後の作品において、“endure”と“stand”と語は異なるものの、共に「耐える」を意味する語を重要な意味をもって用いているのは象徴的である。ヘミングウェイの作品群は、ある意味では、「耐える男」の物語である。そして「耐える」ことは、先に引用した『老人と海』の老人の態度や『日はまた昇る』のジェイクの態度に示されている如く、思考を拒否することと強く結びついている。

動物学者のエドモンド・モリス (Edmond Morris) は、『ザ・ヒューマン・アニマル』(*The Human Animal*)¹¹⁾の中で、現代人の住む社会は「ストレスに満ちた天国」(“a paradise full of stress”)と称したが、おそらくヘミングウェイもこのことを強く感じていたのだろう。彼は頭で考える複雑な社会をできるだけ避け、動物の力をより必要とする森の中やアフリカの奥地、大海の彼方へと出かけていく。ヘミングウェイの諸作品において、登場人物たちが時折見せる思考の拒否の裏側には、動物的感覚を重視し、複雑化した人間の頭脳から生まれた複雑な近代社会を忌避したいと願う作者の強い思いが潜んでいるように思われる。

註

1) Carlos Baker, ed., *Ernest Hemingway Selected Letters 1917-1961* (New York

Charles Scribner's Sons, 1981) p.153.

- 2) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (New York: Charles Scribner's Sons, 1952) p.107. 以下この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- 3) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles Scribner's Sons, 1953) p.152. 以下この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- 4) Ernest Hemingway, “Indian Camp,” *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958) p.15. 以下この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- 5) Ernest Hemingway, “The Doctor and the Doctor's Wife,” *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958) p.27. 日本語訳は拙訳による。
- 6) Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon* (New York: Charles Scribner's Sons, 1960) p.2. 日本語訳は拙訳による。
- 7) Ernest Hemingway, “The Undefeated,” *Men Without Women* (New York: Charles Scribner's Sons, 1955) pp.46-47. 日本語訳は拙訳による。
- 8) Ernest Hemingway, “The Short Happy Life of Francis Macomber,” *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964) p.150. 以下この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- 9) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1957) p.50. 以下この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- 10) Ernest Hemingway, “Soldier's Home,” *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958) p.71. 以下この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- 11) Desmond Morris, *The Human Animal: A Personal View of the Human Species* (London: BBC Books, 1994) p.82.

参考文献

- 石 一郎 『愛と死の獵人<ヘミングウェイの実像>』
南雲堂 1988
- 石一郎編 『ヘミングウェイの世界』 荒地出版社
1970
- 今村橋夫 『ヘミングウェイー喪失から辺境を求めて』
冬樹社 1979
- 岡田春馬 『ヘミングウェイの短編小説』 近代文藝社
1994
- 嶋 忠正 『ヘミングウェイの世界』 北星堂書店
1975
- 高村勝治 『ヘミングウェイ』 研究社出版 1971
- 瀧川元男 『ヘミングウェイ再考』 南雲堂 1972
- 西尾 巖 『ヘミングウェイ小説の構図』 研究社出版
1992
- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. London: Collins, 1969.
- _____. *Hemingway: The Writer As Artist*.
New Jersey: Princeton University Press,
1972.
- _____, ed.. *Ernest Hemingway Selected
Letters 1917-1961*. New York: Charles
Scribner's Sons, 1981.
- Benson, Jackson J., ed.. *New Critical Approach
to the Short Stories of Ernest Hemingway*.
Durham and London: Duke University
Press, 1990.
- _____, ed.. *The Short Stories of Ernest Hem-
ingway: Critical Essays*. Durham, North
Carolina: Duke University Press, 1975.
- Gurko, Leo. *Ernest Hemingway and the
Pursuit of Heroism*. New York: Thomas
Y. Crowell Company, 1969.
- McCaffery, John K.M., ed.. *Ernest Hemingway:
The Man and his Work*. New York: Cooper
Square Publishers, Inc., 1969.
- Morris, Desmond. *The Human Animal: A Per-
sonal View of the Human Species*.
London: BBC Books, 1994.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway*. New
York: Rinehart & Company, Inc., 1952.

synopsis

Ernest Hemingway seems to keep his protagonists from thinking, and most of actions in his works take place in the wilds; in the woods, at the depths of Africa, far off in the sea, etc. He puts his protagonists out of thinking in the complicated modern world and makes them feel good in the wilds. It has much to do with the author's agony of life. This paper offers an analysis of this point of view with frequent reference to relevant parts of Hemingway's stories and novels.